



ジャパントップブランドを めざして (上)

ゲスト/原 喜代志 (福島県JA会津よつば 代表理事組合長)

第36回ゲスト

福島県JA会津よつば代表理事組合長

原 喜代志



はら・きよし

1955年福島県生まれ。1976年会津高田町農業協同組合に入組。おもに信用・共済部門の業務にあたる。2008年会津みどり農業協同組合総務部長を経て、2011年常務理事。2016年に合併して誕生した会津よつば農業協同組合の常務理事を経て、2022年代表理事組合長に就任。福島県農業信用基金協会会長理事。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授

京都大学学術情報メディアセンター研究員

石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

JA会津よつば(会津よつば農業協同組合)

福島県の西部に位置する。2016(平成28)年3月に、会津地方(17市町村)の4つのJA(会津いいで・あいづ・会津みなみ・会津みどり)が合併し、JA会津よつばが誕生。会津よつばブランドの確立と消費地との連携強化に向けた産地づくりに力を入れる。



●組織の概況

組合員数：45,219(正組合員：24,959、准組合員：20,260)

役員数：42(常勤・非常勤含む)

職員数：984(臨時職員含む)

設立：2016年3月

貸出金：793億円

本店所在地：福島県会津若松市
扇町三丁目5番地の6

長期共済保有高：1兆2,459億円

購買品供給・取扱高：64億円

出資金：95億5309万円

販売品販売・取扱高：150億円

貯金：3,195億円

(2023年度実績)

●地域と農業の概況

周囲を山に囲まれた会津盆地は、全国でも有数の米どころ。「会津コシヒカリ」「会津ひとめぼれ」をはじめとする会津よつばブランドは高い評価を得ている。また、トマトやアスパラガス、キュウリは重点振興作物として生産拡大をはかる。極上の会津米の取り組み強化による農家所得の向上、園芸品目の販売高60億円の産地づくり、会津牛ブランド推進による販売強化をめざす。



ジャパントップブランドをめざして

「ならぬことはならぬものです」の教訓が人々のあいだで共有されている会津。自慢の会津米に加えて、トマト、かすみ草でGI（地理的表示）を取得したほか、機械選果場「会津野菜館」を設置して、アスパラガス、キュウリ、チェリートマトの生産拡大をはかっている。ジャパントップブランド挑戦の意気込みを原喜代志組合長に語ってもらった。

■ 賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」その想いを受けて

石田：戦前のことですが、『家の光』の普及部数が目標の100万部を突破した大きな原動力は、1934（昭和9）年1月号から2年間連載された賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」という小説です。

主人公の田中東助が会津（耶麻郡大塩村）で、穀物作と樹木植物（クリ、クルミなど）を組み合わせる中小家畜（ブタ、ウサギなど）の生産振興（立体農業）をはかるため、産業組合を立ち上げるというストーリーです。現在の大塩村はどうなっているでしょうか。



『家の光』で賀川豊彦が24回にわたって連載した「乳と蜜の流るゝ郷」は大好評を博した。福島の一青年が主人公となっている

原：大塩村は、1954（昭和29）年に北山村、大塩村、檜原村が合併して北塩原村が設立され、北塩原村大字大塩となりました。旧3村の名称から1字ずつとって北塩原村というわけです。

大塩地区に限らず、北塩原村全体として農業者の減少、農業後継者の不足が著しいのですが、そのなかで注目すべきは地域農業の維持発展を目的とした農業法人「(株)あいばせ」が設立されたことです。

「あいばせ」は会津地方の方言で、気軽に「さあ、行きましょう」という意味がありますが、農作業受託による耕作放棄地の解消と地域雇用の創出に取り組んでいます。

都会の人たちを観光と農業でもてなそうと棚田オーナー制度を始めたほか、東京農業大学や東北学院大学の学生たちの農業体験を受け入れることで、次世代の若者たちとの交流も行っています。

もう1つ注目すべきは「山の塩」で活性化していることです。塩分濃度の高い



「あぐりかふえC's」ではおいしいお米はもちろん、新鮮な野菜を使ったサラダバーが人気

大塩裏磐梯温泉の温泉水を薪窯で煮詰めて精製した塩を、「会津山塩」というブランドで製造販売しています。

2007(平成19)年に12名の出資者が「会津山塩企業組合」(中小企業等協同組合法による協同組合)を設立したのですが、海塩よりもミネラル分が多く、風味のある塩に仕上がっています。生産が追いつかないほどの需要があります。

この企業組合がJR会津若松駅構内に直営の「会津山塩食堂」を出店しており、そこで名物「会津山塩ラーメン」が味わえます。

石田：ぜひ帰りに寄ってみたいですね。

原：JA会津よつばの直営カフェ「あぐりかふえC's」でも会津山塩を使った「塩むすび」を提供していますので、ぜひそちらも味わってみてください。JAブランドの「極上会津米」と「会津山塩」の両方が楽しめます。

石田：塩むすびと塩ラーメン、これはちょっと大変だ。(笑)

話は変わりますが、農林中金総合研究所の斉藤由理子さんが「過疎地域における集落組織の課題—JA会津よつばの集落組織調査から—」(農林中央金庫『農林金融』2022年10月号)で、管内1,181の集落組織にアンケート調査を行うとともに、代表的な7つの集落組織で事例調査を行い、そのうち4つの集落組織の現状と課題を明らかにしています。

JAと集落組織との関係は歴史的に悩ましいものがありますが、集落調査はどうでしたか。

原：集落組織の全数調査ですが、アンケート調査の事前通知と、アンケート票の配布、回収に全面的に協力させていただきました。

ただ、集落組織の代表者に知らせても「はい分かりました、やりましょう」という感じには、正直に言ってなかなかありませんでした。それぞれ事情がありますからね。しかし、その分析結果は、わたしどもにとってたいへん貴重なものになっています。

斉藤先生もふれられていますが、①集落組織の構成員が減少している、②集落

組織の農業振興と農地維持が困難になっている、③集落のコミュニティ機能が低下している、の3点が重要だと思っています。

石田：4つの事例調査のうち、喜多方市の本村(ほんそん)農事組合だったと思いますが、獨協大学の研究室のみなさんが集落に出入りして、関係人口の拡大による「むらおこし」に取り組んでいますね。



原：そうです。獨協大学との交流はコロナ禍前から続いていましたが、それに加えて、2021(令和3)年度からは「福島県地域創生総合支援事業(サポート事業)」の導入によって地域づくりの専門家が本村に派遣され、フットパスの整備や収穫感謝祭などが行われるようになり、活性化にはずみがつきました。

石田：そうした「むらおこし」の活動にJAも関与することが重要だと思いますが、なかなかそういう事例は見当たりません。行政機構の末端としての集落組織と、JAの基礎組織としての集落組織という二重の性格が、判然としていないことが原因だと思います。

■ ジャパントップブランドへの挑戦

石田：農業面だけではなく、観光面でも「会津ブランド」は強力なものがあります。この力強さはどこから来るのでしょうか。白虎隊というか、親藩・会津松平家が関係しているように思いますが。

原：徳川第二代将軍、秀忠の御落胤、保科正之を祖とする会津松平家ですが、会津のだれもが口にするのは会津藩校日新館の「什(じゅう)の掟」の最後にある「ならぬことはならぬものです」という一節です。什の掟は知らなくても最後の一節はみんな知っています。

もう1つ、城主・藩主という点では、江戸住まいの保科よりも会津の基礎を築いた戦国武将・蒲生氏郷の影響が大きいように思います。織田信長の次女を娶った氏郷は会津91万石の鶴ヶ城主(旧黒川城を改称、通称会津若松城)となりましたが、旧領の近江日野、伊勢松坂の商人たちを連れてきて、定期市の開設、楽市・楽座の導入、手工業の奨励などを行い、会津の発展をもたらしました。

石田：そのようななかで、農業面では



ブランド化に成功した南郷トマト。加工品も次々と開発されている



2020年に完成した会津野菜館。野菜の選果・選別が行われ、集出荷体制の一元化をはかり、有利販売につなげている

G I (地理的表示)の取得による「会津よつばブランド」の知名度向上が注目されます。

原：G Iについては、2018(平成30)年に南郷トマト(登録団体「南郷トマト生産組合」)、2023(令和5)年に昭和かすみ草(登録団体「会津よつば農業協同組合」)が取得し、どちらも「日本農業賞」に輝きました。

石田：素晴らしいですね。さらなる知名度向上に向けて、もう一品ぐらい必要ですね。

原：そのとおりです。南郷トマト、昭和かすみ草は、新規就農者にとって魅力的な品目となっていますが、どちらも会津南部、西部の中山間地域を主たる産地としていますので、それ以外の地域、たとえば飯豊や会津中央部を対象とした品目でG Iをとりたいと思っています。

会津はとても広い(総面積5,420km²、愛知県より広く、愛媛県より狭い)ので、複数のギガ団地構想を進めるなかでアスパラガス、キュウリ、チェリートマトなどの生産拡大をはかり、ひいてはG I取得に結びつけたいと考えています。その一環として、J A全農福島県本部との共同で機械選果場「会津野菜館」を設置しました。

園芸品目がないと、コメだけではなかなか所得が上がりません。水田は大規模農業者への集約がある程度進み、限界に近づきつつあります。大型機械の導入にはお金がかかるので、中小規模の農業者は一大決心が必要です。ですから、コメ+ α の α というところで、園芸品目の拡大をはかろうとしています。

会津の農業者にとって、たとえ利益は出なくてもコメへの自信は相当なものがあります。このためJ Aには有利販売が課せられますが、すべてを買取販売にしまうと、課税事業者ではない農業者の方々が多いので、J Aが消費税分を丸々かぶるような事態が起こります。このような事態を避けるために、インボイス制度が始まった令和5年産米からは、買取販売から受託販売へのシフトを始めています。

石田：どうしても買取販売を希望する農業者には、納税者番号の取得をお願いする必要がありますね。

原：そのとおりです。

■「これなくしては生きられない」という危機感がG1産地をつくった

原：会津野菜館ができたおかげで、キュウリ、アスパラガス、チェリートマトの生産者のみなさんは選別の必要がなくなり、その分面積をふやせるようになりました。きつい夜の選別作業もなくなり、喜ばれています。

石田：かすみ草はヘッドランプをつけて夜中に収穫すると聞きました。

原：夜中の2時、3時から始めます。

石田：それはたいへんだ。

原：確かにたいへんですが、通帳を見たら疲れは吹っ飛びますし、冬は毎年のように家族で海外旅行に出かけられます。そんな夢がかなえられるというのは大きいですよ。

昭和村はもともと葉たばこの産地でしたが、廃作が進み、代わってかすみ草栽培が始まりました。JAかすみ草部会とかすみ草研究会という2つの出荷組織がありましたが、原発事故を境に損害賠償請求事務がかすみ草研究会ではできないということで、JAかすみ草部会に一本化されました。

出荷組織の一本化でJAの販売は大きく伸びました。出荷市場も大田市場のFAJ（株式会社フラワーオークションジャパン）のほかに、全国各地の市場を確保できるようになり、大きな値崩れを防げるようになっています。

石田：そこが野菜・果実と違うところですね。



昭和かすみ草は「雪室」と呼ばれる雪を利用した施設で冷却され、低温輸送で出荷される(写真提供/JA会津よつば)

原：昭和かすみ草は、雪の冷気で予冷したものをコールドチェーンで出荷するので日持ちがします。また、バケツ出荷にしていますので、段ボール出荷とは鮮度がまったく違い、価格面で大きな差を生んでいます。

南郷トマトにしても、昭和かすみ草にしても、これなくしては生きられないという産地の危機感が幸いました。生産者も、JAも、普及員も、みんなが一体化する条件が揃っていました。



JAとJA全農福島との情報共有も欠かせない。JA営農部園芸課の安達一幸課長(右)とJA全農福島の会津野菜館・桑原憲政所長

石田：もう40年以上も前の話ですが、南郷トマトの将来性を危ぶむ声もあったようですが……。

原：確かに、高齢化で生産者が減ってしまうという危機感がありました。ですがそういう危機感があったからこそ、新規就農者を入れて、生産量を落とさない努力をしてきました。

半分くらいやめました。半分くらいスキーがらみで新規就農者がありました。たまたま生産組合のリーダーがスキー場のインストラクターだった関係で、若いスキーヤーを自宅に泊めたことをきっかけにトマトの話にはずみがついて、Iターンが増えていったのです。観光開発が産地発展の後押しをする形になったわけです。また、新規就農者の入りやすさを考えて、法人化にも積極的に取り組んできました。

石田：すばらしいですね。どこにもあるような話ではありません。

原：昭和かすみ草も毎年5、6組の新規就農者があります。昭和村がインターンシップ「かすみの学校」を開設していて、若者たちにかすみ草を学ぶ機会を提供しています。昭和村にはコンビニエンスストアなどはありませんが、そんなところでも仕事に魅力があって、所得が確保できるのであれば、若者たちは必ず集まってきます。

(取材／2024年7月3日)

『家の光』連載の「詰め将棋」コーナー

原喜代志組合長は、小さいころから近所の人から将棋の手ほどきを受けて育った。JA内で右に出る者はいないという実力者である。

その原組合長、長いあいだ『家の光』の「詰め将棋」で腕をみがいてきた。11手詰みのころは歯が立たなかったそうであるが、現在の7手詰みは逆にやさしすぎて、はりあいがなくなってしまったという。その背



JA職員時代に、将棋が縁で人脈ができ、共済事業に力を入れることになったと、原組合長。2024年度の第45回農協人文化賞(農協協会)を共済事業部門で受賞した

景には『家の光』の読者層に合わせて、徐々にやさしくしていった経緯があるようだ。

そんな原組合長であるが、J A会津みどりの設立時には、J A共済連福島県本部からの出向職員と、いっしょに将棋を楽しんだとのこと。なかなか手ごわい共済連職員であったが、その彼も東京で手合わせをした家の光協会職員には勝てなかったそうである。

自分と互角の共済連職員を負かすような手ごわい家の光協会職員がいる。それが誰なのかという話題で、いつとき議論が盛り上がった。

(付記) その家の光協会職員は原組合長の目の前にいた(編集担当者)。アマチュア五段という実力者である。